

発表要旨

題 目： 荻生徂徠における「道」

人間文化創成科学研究科 比較社会文化学専攻
D3 徳重公美（トクシゲクミ）

荻生徂徠（1666 - 1728）は江戸時代中期に活躍した儒学者である。その学問は当時より賛否の反応大きく、後世においては儒教に限らず広く影響を与えたと言われる。また、丸山眞男によって日本近代化の一契機として取り上げられて以後、特にその学問に見られる近代性や政治思想について論じられることの多い思想である。本論は、従来の徂徠研究の検討を視野に入れ、そのための基礎的研究として、徂徠における「道」の概念を取り上げ、その学問全体に通ずる特徴について考察する。

徂徠における「道」の表現は様々である。「先王の道」、「礼楽刑政」、「作為」、「多端」など、多くの語を用いてその内容が他面的に説明される。まず、徂徠において「道」は政治制度を含むものとして定義される。徂徠の「道」に認められる強い政治性は、先行する徂徠研究においても指摘される重要な特質である。更に徂徠は、政治そのものであるこの「道」が「自然」ではなく「作為」によることを強調する。「道」とは、聖人が人間を養育するためにその知恵の限りを尽くして作られた人工物であるとするのである。そして、その人工物である「道」が意図するものは、それぞれに特質の異なる人間すべてを一つの社会の内に矛盾無く包括して養うことであるとされる。徂徠は、「道」が種々に異なる人間を包括して呈する様子を「多端」と述べて、これを肯定して、社会全体の持つ多様性を「道」の特徴とするのである。

これらの解釈の根本的な理解となるものが、人間関係における秩序が天地自然のそれと異なるとする思惟方法である。特に、「道」を説明して各人が己の人欲を無くして天理と一体となることを目指す朱子学が「人道」と「天道」を同一視することに対する徂徠の批判を取り上げて、これに言及する。徂徠はこの批判を通して、個人的修養と平天下の非連続性や、天の不可知性、聖人の作為の正当性、気質不変化という人間観などの考察に及ぶ。その結果として、徂徠は道徳的修養や、朱子学においてはそれによって得られると考えられた天理から、政治としての「道」を独立させ、「道」とは個人における内面的陶冶の手段をいうものではなく、調和した社会構造そのものを説明するものであるという考えに至るのである。徂徠の言う「道」が直接言及するものは個人やその内面ではなく社会構造そのものであり、「道」の自然性に対する否定が、その根拠にあることを本論は論じる。